「小さ子」話の系譜

堀畑　真紀子

はじめに

日本の神話や説話には、体の小さな主人公が異能を発揮し、人々に幸いをもたらすという話がある。これら体の小さな主人公達は、通称「小さ子」と呼ばれ、神の子どもとして人々に理解されている。この「小さ子」話は、日本独特の話[1]であり、日本の神話を始め、説話、昔話、民話、ひいては近・現代の児童文学の中にも脈々と引き継がれている。この「小さ子」話の主人公の範疇に入るものとして『日本伝奇伝説大事典』は次のように述べる。

古くは神話の少名毘古那神（スクナヒコナノカミ）や『竹取物語』のかぐや姫、御伽草子の『一寸法師』など文学作品に登場し、桃太郎、瓜子姫、スネコタンパコ、指太郎、田螺息子など昔話の主人公としても良く知られている。そのほか、東北の座敷ワラシ、ウントクヒョウトク、長野県の小泉小太郎など民話、俗信にまたがって存在するものもある。（589頁）

本稿では、これらの「小さ子」神の変遷を古代から近代にかけて考察する。古代から近代までの「小さ子」神として、古代では記紀の「少名毘古那神」、「かぐや姫」、中世から近世までは『小男の草子』の「小男」と「一寸法師」、「小泉小太郎」、近代では『赤い蝋燭と人魚』の「人魚」、『だれも知らない小さな国』の「コロボックル」、『龍の子太郎』の「太郎」を取り上げる。

一　「小さ子」話の定義

「小さ子」話の考察を行う前に「小さ子」話の定義を示しておこう。『日本伝奇伝説大事典』（589頁）を参考に「小さ子」話をまとめると次のようになる。

①異常に小さな子供として異常な誕生、または出現をする。
②昔話では神に授けられた申し子、または神聖なる存在という属性をもっている。
③異能によって遭遇する厄難を克服したり、難事業を完遂する。
④豊かになり（周りを豊かにし）、良き配偶者を得て、幸福な生涯を送る。

この四つの要素が「小さ子」神にとって重要である。これらの要素は、前述した「小さ子」話の主人公達に共通して存在する。その点を、まずは明らかにしていこう。

少名毘古那神は、『古事記』上巻、『日本書紀』巻第一、風土記、万葉集に登場する。それぞれの成立は、『古事記』が七一二年、『日本書紀』が七二〇年である。『風土記』『万葉集』の成立年代は明かではないが、古代の成立である点は間違いない。

少名毘古那神は、父親の高皇産霊尊から生まれ、虫の皮を着、イモのさやで作った天羅摩船（アマノカカミブネ）に乗って、波頭の間からこの世に現れる（『古事記』）。この点から彼が小男で、神の子であることが理解できる。『日本古典文学大辞典』に依れば、彼は「穀霊神」であり、「出雲の国作りの大穴持命（私注－大国主命）と結合して、国造り・医療・禁厭・酒造・石神の霊能を持つに至った」（543頁）とある。この点に異能と難事業の完遂を窺うことができる。その結果、人間に幸福をもたらすのである。

『竹取物語』の成立は、『日本古典文学大辞典』に依れば平安時代初期である。

かぐや姫は月の都の人である。竹筒の中にいたのを翁に発見された。その時は三寸ばかりの小人であった。かぐや姫は純粋には神の子ではないが、竹取の翁はかぐや姫を、神仏などが仮にこの世に現れ人間の姿に変化（へんげ）している人ととらえていた。姫の異能については、竹取の翁がかぐや姫を見つけた後、富豪になること、姫の容貌が素晴らしいこと、翁が姫を見ると気分の悪さ、腹だたしさがなくなること、等が挙げられる。難事業の完遂という点ではかぐや姫の話は少々趣を異にする。また、人を幸福にするという点に置いても、竹取の翁にはある種の幸福がもたらされたが、五人の求婚者達や帝にとってはある種の不幸がもたらされたといえるかも知れない。こういう点は「小さ子」話の変化と考える。

「小男の草子」の成立は、『日本古典文学大辞典』に依れば、室町時代末期ないし安土桃山時代である。また、「一寸法師」の成立も同辞典に依ると室町時代の成立である。しかし、「一寸法師」が「『小男』に先立つとすべき根拠は乏しい」（101頁）と考えられている。

奉公を志して都に上ってきた身の丈一尺程の小男が、ある女房の家に雇われた。毎日清水山へ通って松葉を集めていたが、ある日、清水参詣の美しい上臈を見、恋煩いとなり、主の女房の薦めで上臈の許へ文を送る。上臈は文の言葉が優雅なのに心を動かし、小男に会うが、その姿に失望し、拒絶する。しかし、小男の当意即妙の和歌の応答に感じ、契りを結ぶ。二人の間には子供ができ、一家は繁栄した。後に小男は五条の天神と顕れ、北の方は聖観音と成り代わって、人々を救った。

主人公は小男であり、彼の異能は優れた和歌の才能、この異能によって上臈を手に入れるという問題を克服する。その後、小男は五条天神となり人々を救う。

一寸法師は、翁と媼との住吉大明神への祈願によって生まれた。その子は背が一寸しかなかったので一寸法師と名付けられた。彼は神ではない。特別な異能も備わっていない。しかし、神の加護があった。一寸法師は、宰相殿の姫君を策略（自らの力）によって手に入れる。鬼との闘いでは、小さい体を上手く利用しての勝利である。そして、彼は、鬼退治によって手に入れた打ち出の小槌で背丈を伸ばし、黄金や銀を打ち出し、姫と共に都へ上り、住吉大明神の約束通り末代まで繁盛して栄えた。

主人公は背丈が一寸しかない小男で、特別な異能は持っていない。しかし住吉大明神の加護によって問題は克服され、幸福を手に入れる。こういう点、つまり主人公に異能は備わっていないが、神の加護がある点は「小さ子」話の変化と考える。

小泉小太郎は、小縣郡西鹽田村に伝わる民話であり、その成立は不明である。柳田國男「桃太郎の誕生」によると、「小太郎が怠け者で何もせずに飯ばかり食つて居たこと。是は信州が物草太郎の郷國であるだけに、殊に偶然の挿話とは思はれない。説話の英雄が最初は小さく貧しく、又は形が見苦しかつた外に、往々にして愚鈍であり怠惰であつたと傳へられて居る。それが常理を以て豫測し得なかつた奇跡を現ずることは、蛇や田螺の形を假りて出て來たといふ話と趣意に於て同じである」（135頁）とされている。物くさ太郎は室町時代の成立であるため、この民話がそれ以降であることは確実である。また、柳田氏は昔話が「近世に入つてからの變化が最も著しく、その色々の形が鄰を接して併存する」（11頁）と言い、さらに「説話が近世に入つて急に成熟」（12頁）するという。

住持である父親と大蛇である母親との間に生まれた赤ん坊が、産川で小泉村の老婆に拾われ、小太郎と名付けられる。小太郎は小男であった。小太郎の異能は、山中の萩を一日で刈り取り、二つに束ねて持てるような力である。この小泉小太郎の話を、柳田國男氏は「犀川盆地の泉小太郎と、元は一つであつたろう」（135頁）と言う。泉小太郎の父は東高梨の白龍王、母は犀龍である。母は姿を恥じて湖水に入る。この泉小太郎の事業は、母の犀龍の背に乗って、岩山を突き破り、水の路を越後の海ま

で切り開いたことである。このように、小太郎は力持ちという異能によって、成長後、湖を干拓し、人々に幸福をもたらす。

『赤い蝋燭と人魚』は、一九二一年二月一六日から二〇日まで「東京朝日新聞」に掲載された。作者は小川未明である。

北方の海に住む人魚の母親が、我が子には人間の世界で幸せになってもらいたいとの願いから、海岸の小高い山にある神社の石段の下で赤ん坊を産み落とす。善良な貧しい老夫婦がこの子を拾い、「神様のお授け子」として大切に育てた。成長した人魚の娘は、蝋燭に貝や魚、海草の絵を描く。その絵は誰をも引きつける不思議な力を持っていた。このため蝋燭屋は繁盛する。しかし、店の繁盛によって老夫婦は金欲を持つようになり、ついに大切に育てていた人魚の娘さえも香具師に売ってしまう。娘は自分の悲しい思い出に赤い蝋燭を二、三本、蝋燭屋に残す。その晩、大暴風雨が起き、何隻もの船が難破する。その後も、赤い蝋燭がお宮に灯った晩は、大暴風雨になり、人々に災難をもたらす。幾年も経たずしてその町はなくなる。

人魚の娘は異常に小さい子供ではないが、人魚という異形で登場する。また、人魚が水界と関わりを持つことや赤ん坊が神社の石段の下に捨ててあったこと、娘の塗った赤い蝋燭がお宮に灯った晩、大暴風雨が起きることなどから、人魚の娘は神の子ではないが神聖なる存在であることが理解できる。人魚の娘の異能は、彼女が描いた絵の蝋燭が不思議な力を持つという点である。娘の異能によって貧しかった老夫婦の生活は豊かになる。その後の物語の展開は未明の創作であるが、この物語が「小さ子」話を骨子として構成されていることは明らかである。

『だれも知らない小さな国』は一九五九年に出版された、佐藤さとるの作品である。

コロボックルの先祖は少名毘古那神である。姿は、三センチそこそこ位で、小山の地面の下に住んでいる。昔の小山は、コロボックルの天下であった。気楽に外で遊び回り、地下には眠るときだけ帰っていた。しかし、ある日、小山にコロボックルがいるという噂を聞いた人間が、金儲けの種にしようとやって来た。彼らはコロボックル達を捕まえ、見せ物にした。怒ったコロボックル達は、小山にやって来る人間の目や耳を潰すなどして抵抗する。それ以来、小山は人々から怖がられるようになり、コロボックル達も人間の前に姿を現さなくなる。しかし、世の中が進むにつれて、小山のことを怖がらない人間が出てきた。そういう人にいつか小山を荒らされることになるかもしれないという危惧を感じ、コロボックル達は自分達の味方の人間を捜すことにする。そこで、長い時間をかけてセイタカさんという人間の協力者を得る。その後、村に有料自動車道路が通ることで小山が潰されるという問題が生じる。コロボックル達は、セイタカさんの助言を受け、体が小さく、人間の目に触れにくいという特性を生かし、工事関係者や新聞社の人々が目覚める

直前に「土地を売らないように」と囁く行動を起こす。その結果、建設計画は修正される。

コロボックルの先祖が少名毘古那神であるという点から、彼らを「小さ子」神と見為すことができる。コロボックルは三センチそこそこの小人で、彼らの異能は人間の目にも止まらないほどの速さで動けることである。しかし、これは異能というよりむしろ特性に近い。また彼らは直接、人々に幸福を与えるわけではない。しかし、この物語が「小さ子」話の近代版であると考えると、そこには当然「小さ子」話にも変化が生じるであろう。

『龍の子太郎』は、小さ子話である民話「小泉小太郎」「泉小太郎」を現代的に創りあげた作品で、一九六〇年に出版された。作者は松谷みよ子である。

太郎は、村の掟を犯し、龍となった母親と木こりの父親との間に生まれた子供である。太郎は、川で祖母であるばあさまに拾われる。太郎の脇の下には、鱗のようなあざがあった。ある日、のんき坊主でなまけんぼうの太郎は、ばあさまから龍になった母親のことを聞き、母親捜しの旅に出る。太郎は天狗から「百人力」をもらうことで、水の源を握り、毎年山のような献上物と人身御供を取り上げる黒鬼を退治し、あやや麓の人々を救う。そして、麓の村で人々の歓待を受け、初めて豊かな村を知り、自分の村の貧しさに気づく。旅先でのにわとり長者の家では、過酷な労働の中で米作りを覚える。湖で、太郎は母龍と巡り会い「三びきのイワナをひとりで食べたものはりゅうになる」（98頁）という掟を知る。しかし、太郎はその掟のおかしさを指摘する。イワナ三匹は、社会が豊かであれば罪ではない。社会の貧しさがいけないのだと考える。太郎は母龍、動物たち、あや、仲間達の協力を得、山を切り開き、母龍が住んでいた湖を流すことによって、広い豊かな土地を作り上げる。その時、母龍は人間に戻る。広い土地に人々が集まり、やがて見渡す限り田圃ができる。太郎はあやと結婚し、みんな楽しく、幸せに暮らす。

太郎は小男ではないが、母龍から生まれたことや川でばあさまに拾われたことなどから、異常な出生や水界との関わりを読みとることができる。太郎の異能は生まれつき備わっているのではなく、彼の体験や努力によって生み出される。難事業の完遂は、母龍と共に広い土地を作り上げることである。その後、太郎は結婚し、みんなで幸せに暮らす。

以上、「異常に小さな子供・異常な誕生、出現」「神に授けられた子供又は神聖なる存在」「異能による問題解決」「豊かになり、幸福な生涯を送る」の四つの要素によって、それぞれの作品を検証した。その結果、それぞれの作品が「小さ子」話の系譜に連なることが理解できる。

二　「小さ子」神の変遷

前章で古代の少名毘古那神から、近代の龍の子太郎までの「小さ子」が、「小さ子」神の系譜に連なることを検証したが、その検証より「小さ子」神の特徴が時代によって変化することが見えてきた。よって、この章では「小さ子」神の変遷について考察する。

古代の少名毘古那神は父神、高皇産霊尊から生まれ、大国主命と共に国作りをする。母親ではなく、絶対的な力を持つ父親から生まれたということが少名毘古那神の力を象徴しているように、彼は全知全能の神で、人間の及ぶところではない絶対的な力の持ち主であり、当然人々から畏敬の念で捉えられている。

『竹取物語』では月の都と人間の世界に大きな隔たりがあった。月の都は人間の憧れを象徴する世界、則ち無憂の世界（美しく、老いず、憂えのない世界）である。その都の人にとって人間の世界は賤しいところである。姫が昇天する時、姫は穢れた地上の食べ物を浄化する薬を飲み、人間の感情を忘れる羽衣を着る。人間達は、姫の昇天を止めることが出来ず、ただ見送るだけであった。この月の都と人間の世界の格差は、個人にも及ぶ。かぐや姫と翁や五人の貴公子、帝との間にも、人間の力ではどうすることも出来ない大きな格差があった。人間世界の最高の権力者である帝の求婚でさえ、姫は受け入れないのである。そこには、神と人間との断絶に似たようなものが存在していた。

このように、古代の「小さ子」神には、人間よりも絶対的な力を持つという特徴がある。

中世の「小さ子」であの小男と一寸法師は、少名毘古那神やかぐや姫と少し異なる。小男の丈一尺の姿を、主の女房は「あのなりして」（296頁）と言い、上臈は小男の姿を見て、初め求婚を拒否する。一寸法師は両親から化け物風情と言われる。このように異能を発揮する前の「小さ子」神は、人々から蔑まされている。しかし、小男が優れた和歌の才能を発揮することで、主の女房や上臈は彼を凡人とは異なる存在として扱う。一方、一寸法師には、住吉大明神の加護があるというだけで、異能は備わっていない。彼は自力で、宰相殿の姫君を自分の妻にし、鬼を退治する。そして打ち出の小槌で背丈を伸ばし、金持ちになった一寸法師を帝は賤しい身分の者ではないと捉える。このように、初め軽蔑の対象であった小男や一寸法師が、異能や力の発揮によって凡人とは違うという意識を人々に持たせる。そして物語の最後に、小男が五条天神の前身であるとし、一寸法師には住吉大明神の加護があったことを明らかにする。これは、小男や一寸法師の幸いが、人間の及ぶところのものではなく、神や神的存在であったから可能であったことを物語っている。ここには、古代の「小さ子」神のように絶対的な力を持つものではないが、やはり人間よりも力の強い神の存在を窺うこ

とが出来る。

小泉小太郎は寺の住持と大蛇の子どもである。泉小太郎は鉢伏山の神或いは東高梨池の白龍王と犀龍の子どもである。

小太郎は初め怠け者で飯ばかり食う役立たずと人々から思われていたが、成長後、異能を発揮し、湖を干拓する。この大事業が人間の及ぶところのものでないことから、人々は彼を神の子として捉える。

前章で、この民話の成立が室町時代以降であると述べたが、成立時代についてさらに言及すると、小太郎の母親が龍の姿を恥じて湖水に入る点に近世的な特徴が窺われる。古代、蛇・龍は神として崇められていた。しかし、時代が下るに従って神の座から引きずり下ろされるようになる。泉小太郎の母親が龍の姿を恥じて湖水に入るのは、母親の神威が下落し、魔物（邪神）とし人々から見られていたからである。そして母龍自身も自分の姿を恥と感じる。中世の「小さ子」神は姿・格好を人々から特異な目で見られていたが、自分の姿を恥ずかしいとは考えなかった。母龍は「小さ子」神ではないが、神が自分の姿を恥と思うのは、合理主義が出てきた近世あたりの感情ではないかと考える。このような点からこの民話を中世から近世にかけて生み出されたものと見ることが出来よう。

以上より、中世の「小さ子」神（小男・一寸法師・小泉小太郎）は、「軽蔑の対象－異能の発揮－富と幸福－神の子としての認識」という特徴をもつ。そして、古代の「小さ子」神のように絶対的な力を持ってはいないが、優れた和歌の才能や成り上がりを実現する神の加護、干拓という大事業は、神の威力を示すもので、人間はそれを畏怖の念で捉えていたといえよう。

『赤い蝋燭と人魚』では、娘の姿が異形であることから香具師に売られ、娘自身も自分の姿を恥じている。ここには、小太郎の母龍と同じような特徴が窺われる。しかし、娘が異能を発揮しても、老夫婦や人々は彼女が神聖な存在であると認識しない。ここが中世と異なる点である。この「小さ子」神の神性の非認識は、神威の低下をも意味する。娘は見せ物として香具師に売られることになった時、どうすることも出来ず、ただ悲しむだけであった。ここには中世の「小さ子」の神のような力は存在しない。このような神性の非認識と神威の低下が、近代の「小さ子」神の特徴と考える。

『だれも知らない小さな国』のコロボックル達は、素早く動くことが出来、夢を操るなど神の子である片鱗を見せているが、人間に生命を脅かされる存在であった。ここに「小さ子」神の神威の低下を読みとることが出来る。しかし、『赤い蝋燭と人魚』の人魚が何も行動しなかったのに対して、コロボックル達は行動し、自分達の世界を守る。作者は、人間よりも弱い存在であったコロボックル達を人間に負けぬように成長させるのである。危機を目の当たりにし、消極的に自閉（鎖国）していたコロボックル達が、自らを解放（開国）し、動き、変革を勝ち取り、こ

れからは「なんでもやってみるつもりにならないといけないな」（223頁）というように積極的に行動する態度に変わるのである。そこには「小さ子」神の精神的な成長が窺われる。

「小泉小太郎」を骨子としている『龍の子太郎』は、太郎が母龍と協力して難事業を完遂することから、中世と同じように、人間より神が強いという力関係をそのまま引き継いでいるといえよう。しかし、太郎の事業を完遂する力は旅での体験によって培われる。太郎は神と通ずる面を有しながらも、神の子としての異能は備わっていない。彼は人間のように体験を積み重ねることで肉体的・精神的に成長し難事業を完遂するのである。このように「小さ子」神である太郎の異能の低下は、太郎に人間的な要素を持たせることになった。ここが「小泉小太郎」と大きく異なる点である。もう一つ異なる点として重視したいのは、母龍が罪を犯しているという点である。古来から、湖は神が守っていた。その神は、田沢湖の田沢姫のように姫神であった。姫神が守る湖を破壊することは許されない。だが、『龍の子太郎』の場合、湖には罪人となった太郎の母龍が住んでいた。その母龍を息子が説得した上で、湖を破壊するのである。迷信を信じる人も、罪のために龍となった母とその子供が協力をして行う湖の破壊であれば、祟りも怖くはない。人々のために母子が湖を壊すことに、何の問題もなくなる。こうして湖を破壊する論理が、本作品には用意されたのである。

中世の「小泉小太郎」の骨子を持った『龍の子太郎』である

が、「小さ子」神である太郎の異能の低下によって太郎は人間的要素を持つようになった。また、母龍が罪人という点より湖を破壊する論理が見いだされた。この二点が『龍の子太郎』の近代的な特徴である。

以上より、近代における「小さ子」神の特徴は神性の非認識と神威の低下であることが理解できる。なぜ、そのような状況が生じたのか。唐木順三氏の「おそれという感情」でその理由を理解することができる。

十七世紀のデカルト以來、人間理性の力を信じ、理性を正しく行使するならば、世に不可解なことはなにひとつないと信じ、人知人力の無限の能力を信ずるといふ方向を辿るつて今日に到つた。それが近代をして近代たらしめてゐる根本的な特徴といつてよい。從つて人智人力以上のもの、形而上的なもの、神聖なものを、人智の未發達時代の遺物とするか、無用の長物とするか、また無視するか、さふいふ方向に進んできてゐる。つまりは、おそれといふ感情を不用のもの、無用のものとしてきたのである。（101頁）

この近代化によって「小さ子」神の神性は認識されなくなり信じられなくなった。その結果、「小さ子」の神威は弱まるのである。「小さ子」の神威の低下によって、問題は小さ子自身の努力によって解決され、小さ子はこの問題解決によって成長

する。猪熊葉子氏は「児童文学にあらわれた小人達」で「伝承世界の住人達は始めから終わりまで与えられた性格をくずすことがありません」（83頁）と言う。しかし、近代において「小さ子」は成長するのである。そして、この自力での問題解決と成長によって「小さ子」は人間的要素を帯びるようになる。その人間的要素を帯びた「小さ子」像には、当時要求とされた児童像、人間像が反映された。具体的には、「赤い蝋燭と人魚」の人魚に〈赤い鳥〉時代に共通する児童像が反映され[2]、コロボックルでは弱者達が協力し、非暴力で問題を解決する人間像[3]、『龍の子太郎』では、巧みに隠された社会問題を見いだし、論理的思考で解決し、多くの者たちの協力を得て、社会を変革する児童像[4]であった。

三　「小さ子」話の可能性

古代の「小さ子」神は、人間よりも絶対的な力を持ち、人間からも畏怖の念で捉えられていた。また、中世の「小さ子」神も古代のように絶対的な力を持つわけではないが、異能や力を発揮した後、人々から神聖な存在として認識されるようになった。それに対して、近代の「小さ子」神では、神性の非認識と神威の低下によって、時には神と人間との力関係が逆転した。このように「小さ子」神の神威は時代が下るに従って低下する。そして、この神威の低下により「小さ子」話の展開が変化する。古代の「小さ子」神では、絶対的な存在であるため、神の出現と異能、そしてどういうことをしたのかという事跡が主に描かれた。中世の「小さ子」神では、軽蔑の対象であった「小さ子」神が異能や神の加護によって立身出世を果たすということに力点が置かれた。近代の「小さ子」神では、神性の非認識と神威の低下によって、問題は自らの努力と力によって解決しなければならなくなる。そこで問題を解決するまでの過程が長く描かれる。どのようにして力を身に着けるのか、それに伴う苦労、苦悩が描かれ、主人公は精神的に成長することになる。その成長過程で主人公に個性が生まれる。

このように神威が低下するに従って「小さ子」話に話の展開が生じた一方で、時代を超えて引き継がれているものがある。一つは「小さ子」が何らかの事業を行い、人々に幸いをもたらすということである。この点は全ての「小さ子」話に共通することである。二つ目は、「小さ子」の難事業や問題の克服が現世で行われるということである。つまり、古代から近代にかけての「小さ子」話は、西洋のように現世とは違う世界（異境）で行われるのではなく[5]、現世での物語という特徴を持つのである。三つ目は、「小さ子」が克服する難事業は、その当時の課題とされていたものである。貧しい時代は貧しさの克服という課題（国造り〈古代〉、干拓〈中世〉、開発による豊かさ〈近代〉）があった。その他にも、それぞれの時代における人々の願望（出世と貴女を得ること〈中世〉、お金儲け〈近代〉）が描

かれている。これらの考察を踏まえた上で、今後の「小さ子」話の可能性をどのように考えるべきであろうか。

上笙一郎氏は「現代日本の空想物語」で「原始時代の神話このかた伝承文学のなかを貫流していた魔力ーことばを換えれば空想力」は、「大衆的サイエンス・フィクションの主人公たちの超能力」の話に移っていったと言う。そして「現代日本の空想物における魔力の衰退を回復させる道は、大衆的サイエンス・フィクションの主人公達（私注ー「鉄腕アトム」「パーマン」など）に学ぶ以外には、早急には見つからないと思う」（53頁）と主張する。

神宮輝夫氏は『児童文学の中の子供』で次のように述べる。

神話や伝説を土台にしなければ効果的に表現され、機能しないとしたら、深い哲学性や神秘性をそなえた神話をもたないとされる日本人は、すぐれたファンタジーを生みだせないことになる。もちろん、日本の伝承文学その他がいちがいに哲学性に欠けるとはいえないから、そこから素材を発見し個性的なものを加えたり構成しなおしたりする方法は考えられる。また、外国ものを素材として利用することもできる。だが、伝承に依拠しない方法がどこかにあるはずである。（48頁）

イギリスのように、宗教的哲学がないにしても、昔話や民話が、今でも、語り継がれているのは日本人の心の琴線に触れるものがあるからである。わたしは「小さ子」話が空想物語として再度、描かれることを期待したい。「小さ子」話が持つ異能を発揮して、人々に幸いをもたらすという話を、日本人が持つ魔性や仏性など論理では説明できない心の内を利用すること[6]で、空想物語を描くことが可能ではないかと考えるからである。

「小さ子」神が登場する「小さ子」話は、西洋の妖精物語とも魔法の物語とも異なっている。その他世界の国々の物語については、今述べるものはもたないが、管見では「小さ子」話は日本独特の話と言ってよいだろう（この点については今後検討を加えていきたい）。その「小さ子」話が、現代において途切れようとしている。これは、日本の児童文学のみならず、物語文学における損失であろう。何らかの形で「小さ子」話の復興が望まれる。

その可能性としては今までの考察の中から、その時代の課題と願望を明らかにし、それを成し遂げる人物（少年少女）の成長物語として描くということが考えられる。物語の骨格は連綿と続いた「小さ子」話によってある程度みえている。その骨格に沿ってどのような肉付けを行うかは作者の裁量と力量による。今までの「小さ子」話は「日本」が舞台であったが、国際社会の現代では舞台は「地球」である。これまでの「小さ子」話の課題は日本の民衆の課題であったが、現代の「小さ子」話は人類の課題であるべきである。その中で魅力的な人間への成長を

描き出すことが、「小さ子」話の復興に繋がるであろう。

【注】

（1）西洋の小人の特徴については、T・カトイリーが『妖精の誕生』（市場泰男訳　教養文庫１９９７）で述べている。まとめると次のようになる。ほとんど全ての国々で、人間と異なり、またより高次の神的存在とちがった別種の存在が人々の間で広く信仰されているのが見出される。それらの存在はふつう、地下の洞穴とか、水底とかいった独自の領域を住みかとすると信じられている。それらは一般に、人間よりすぐれた力と知識をそなえているが、人間同様必然的な死の運命を避けられない。ただし、寿命は人間より長い。これら人間や神的存在と異なる別種の存在の中に小人がいる。この先祖を、カトイリーは北方神話のずる賢い小人ドゥエンガルと考える。ドゥエンガルは背が低く、足が短くて手が長く、直立すると手がほとんど地面につく。彼らは金、銀、鉄など金属の細工ではすぐれた専門家である。彼らはエセル神族や人間の英雄たちのためにふしぎな異様なものをたくさん作る。彼らの炉から生まれた武器や甲冑にかなうものはない。しかし、こういった贈り物は彼らの自発的意志によって与えられるのでなければならない。もしも腕ずくで彼らから強奪すると、それには必ず災厄がつきまとう。

（2）拙稿「小川未明〈赤い蝋燭と人魚〉論」『国語国文学研究』第三五号　熊本大学国語国文学会　参照

（3）拙稿「佐藤さとる『だれも知らない小さな国』論」『方位』第二十二号　熊本近代研究会　参照

（4）拙稿「松谷みよ子『龍の子太郎』論『近代文学論集』第24号　日本近代文学会九州支部　参照

（5）ルイス・キャロル『不思議なアリス』、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』シリーズやJ・R・R・トールキンの『ホビットの冒険』など西洋の作品では、異境での主人公達の冒険談が多い。

（6）日本人には程度の差こそあれ、俗信、迷信といって切り捨てられない魔性、仏性を心の中に持っている。例えば、現代でも家を建てる時には土地の精霊を鎮めるために地鎮祭をする風習が残っている。私たちは土地の精霊の存在には半信半疑だが、やらないと落ち着かないものを心の中に持っているのである。唐木順三氏が述べたように、近代化に於ける「おそれという感情」の喪失は完全ではなかった。今尚、私たちの心の隅に残っているのである。この心理を用いることで、「小さ子」話の空想物語が可能になると考えるのである。この手法を用いた作品の一つに佐藤さとる『だれも知らない小さな国』がある。

（引用文献）

『日本伝奇伝説大事典』角川書店　１９８６
新編日本古典文学全集１『古事記』小学館　１９９７
『日本古典文学大辞典』岩波書店　１９８４
新潮日本古典集成『御伽草子集』（高安本）
日本古典文学全集『御伽草子』小学館
柳田國男「桃太郎の誕生」『定本　柳田國男集　第八巻』筑摩書房
『松谷みよ子の本２』「龍の子太郎」講談社　１９９４

佐藤さとる『だれも知らない小さな国』講談社青い鳥文庫　1996
唐木順三『日本の心』筑摩書房　1965　初出『日本』1964・4
猪熊葉子「児童文学にあらわれた小人達」『日本児童文学』1972・2
上笙一郎「現代日本の空想物語」『日本児童文学』1967・10
神宮輝夫『児童文学の中の子ども』NHKブックス　1979

（参考文献）
新編日本古典文学全集2『日本書紀』小学館　1997
新編日本古典文学全集5『風土記』小学館　1997
日本古典文学全集『竹取物語』小学館
名著復刻全集近代文学館　小川未明『赤い蝋燭と人魚』1969・4
佐竹昭広『下剋上の文学』ちくま学芸文庫　1992・2

（ほりはた　まきこ／大学院二五回修了）